

進んで人と関わり，コミュニケーションを 図ろうとする児童の育成

～ 6 年生 “World Trip” の実践を通して～

鳴門市第一小学校 宮脇 郷子



1 はじめに

本校は，平成 19・20 年度に文科省と鳴門市より指定を受け英語活動等国際理解活動推進事業の拠点校として 2 年間の研究に取り組んできた。5・6 年生の外国語活動は今年度で 5 年目を迎える。当初は『英語ノート』もなく試行錯誤の連続であったが，全校挙げて取り組む中で，本校なりの単元構成や活動内容も模索してきた。その一端を紹介したい。

2 “World Trip”（『英語ノート2』『行ってみたい国を紹介しよう』）の実践

① 単元について

本単元は，世界の国々の名前や名所を話題とする。児童は前単元 “School Trip” で修学旅行の行き先のいくつかが世界遺産であることを知った。東大寺や金閣寺の大きさ・美しさを体感し，それを現在にまで残した人々の英知や努力を知ることで，外国の世界遺産に対しても興味をもつことができたようである。世界遺産を中心に，自分の行きたい国や見たいものを興味をもって調べ，それを伝える活動をすることで，コミュニケーションの楽しさを味わわせたいと考えた。

② 単元目標

- (1) 外国にはさまざまな世界遺産があることに気づく。
- (2) 行きたい国やその理由を尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。
- (3) 自分の行ってみたい国やその理由を尋ね

たり答えたりし，積極的にコミュニケーションを図ろうとする。

③ 単元計画

時	目標（○）と主な活動（①・・・）
1	○世界遺産の写真を見て，世界のいろいろな場所を知る。 ①修学旅行の行き先が世界遺産であることを知り，外国の世界遺産の写真を見て話し合う。 ②『英語ノート』のデジタル版を見て，国旗クイズをし，国旗の色や形には意味があることを知る。 ○行きたい国を尋ねたり答えたりする。
2	①行きたい国とその理由を聞き，概要を理解する。 ②行きたい国を尋ねたり答えたりする表現を知り，ゲームをして表現に慣れる。 ○行きたい国を話す準備をする。
3	① HRT と JTE の話を聞き，発表の仕方を知る。 ②ゲームをして理由の言い方に慣れる。 ③グループで発表の練習をする。
4	○行きたい国とその理由を尋ねたり答えたりして，積極的にコミュニケーションを図ろうとする。 ① ALT の出題する「行きたい国あてクイズ」をする。 ②行きたい国とその理由をインタビューし合う。

④積極的なコミュニケーションへの手だて

(1)使用表現に慣れ親しむ

積極的なコミュニケーションを支えるには、使用表現にある程度慣れていることが必要である。子どもたちが、興味・関心をもって楽しく活動しながら、自然に英語の表現を聞いたり発話したりできるように、ゲームの方法を工夫している。

本単元では第2時に、行きたい国を尋ねたり答えたりする表現に慣れるために「すごろくゲーム」を実施した。10枚程度の国旗カードを黒板に貼り、チームに分かれてALTとジャンケンをし、勝ったチームが駒を進めていく。全員で言うジャンケンのかけ声を“Where do you want to go? One,Two,Three!”とし、駒を進めるときには“I want to go to ____.”と声をそろえて言うことで何度も同じ表現を使うようにした。

第3時でも、その国に行きたい理由の言い方に慣れる活動として、「仲間集めゲーム」をした。子どもたちは、ゲームを楽しみながら抵抗なく表現に慣れることができたように思う。また、ゲームの中では、声を掛け合ったり、励まし合ったりして関わりを深め合う姿も見られた。

(2)「伝えたい」意欲をもつ

子どもたちが「本当に伝えたいもの」をもっていることが、積極的なコミュニケーションを促すと考える。本単元では、総合的な学習の時間との関連を図り、事前に世界の国々について調べ、自分が行きたい国とその理由をワークシートにまとめた。図書室の本やインターネットで調べ学習をしたり、好きな写真を選んだりすることで、子どもたちの「行きたい国」への思いは高まっていった。

他教科では活躍の場面が少ない子どもが、積極的に友だちと関わり、堂々と発表する姿を見て、子どもたちの「心」を動かす題材設定の大切さを改めて感じた。インタビューの後に、ワークシート裏面の世界地図に自分の

シールを貼り合ったこともコミュニケーションへの意欲をもたせる要因となった。



(3)よりよい関わり方を体験的に知る

インタビュー活動の前に、HRTとALT・JTEがさまざまな会話のモデルを示し、相手にとって分かりやすい伝え方、相手が話しやすい聞き方について考える時間を設けた。

その中で子どもたちは、相手意識をもって写真を指さす等の工夫をすることや、視線や表情・速さに気をつけて話すことで、より分かりやすく伝えられることが理解できた。また、聞いたことを繰り返したり相づちを打ったりすることで、相手が安心して話せるように聞くことが大切であることに気づいた。その後のインタビューでは表情豊かに思いを伝え合う子どもたちの姿が見られた。

3 おわりに

子どもたちが活動の中で豊かにコミュニケーションする姿を目指して単元構成や活動内容の工夫に取り組んできたが、まだまだ十分とはいえない。今まで以上に、子どもたちの興味や意欲をとらえ、積極的に活動する姿をイメージしながら目標に向けた活動を仕組んでいくことで、外国語活動の時間での学びは確かなものになっていくと考える。

活動の中で成長する子どもの姿を求めて、今後も研究を重ねていきたい。